

その 21

皇紀 2600 年の 『萬葉集物語』



海行者 美都久屍 山行者 草牟須屍 大皇乃 敵尔許曾死米 可敵里見波 勢自
御民吾 生有驗在 天地之 榮時尔 相樂念者

この 2 首は、「ある本」の表紙の裏、つまり、見返しに印刷されていた歌の原文である。この歌の訳文等は、改めて紹介する。ところで、もとこ先生の話の中で 1 つ気になっていたものがあった。「私、小さい時から『萬葉集物語』なんて本を読んだりして」の中にあつた『萬葉集物語』である。つまり、「ある本」とは、この『萬葉集物語』のことだが、この本は、もとこ先生が明日香小学校に上がると、お母さんが先生のために買ってくれた、少年少女向けの万葉集入門書である。先生は、まるで童話本を読むように、これを繰り返し読んだ。以来、ことあるごとに万葉集をひも解いては、しばし万葉の世界を逍遥したという。まさに、先生にとって、万葉集の原点ともいう本である。著者は森岡美子さんという、当時若う若い万葉研究者で、その本はまだ先生の家のだどこかにあるというのである。「日めくり万葉集」というテレビ番組としては、この本を手にも、当時のことを話してもらえるかどうかは、話のリアリティを伝えるためにも、番組作りの上で大きなポイントである。それを手にしているかどうかは大違いということで、先生には、「お忙しいところ、誠に申し訳ないけど、何とか探し出してほしい」とお願いしていた。先生も、「番組のためもあるけど、それ以上に、自分がもう一度読んでみたいので、何とか探してみましよう」と言ってくれた。

しかし、インタビュー当日まで、『萬葉集物語』が出てくることはなかった。代々木のイスラームのモスクでインタビューしたが、花卉を撒き散らしたような光を放つ聖堂のステンド・グラスをバックに、アラビア風の衣装をまとったもとこ先生は美しく、話の中身はこの上ないものになったが、この本を手にも紹介できなかったことがなんと残念でならなかった。



もとこ先生の「日めくり万葉集」は、2008年9月、好評のうちに放送が終わった。そして、それから1か月後、新聞の小さな広告欄を見て飛び上がった。それは、見逃すほどに小さな本の広告で、「昭和時代の名著の復刻本」として、森岡美子著『萬葉集物語』とあるではないか。間違いなく、先生に探してもらっていた本である。「なぜ今?」、一瞬目を疑った。すぐ書店に飛んで行って購入し、一気に読破した。素晴らしい本だった。「帯に、『かつてこんなに美しい日本語がつかわれていた時代がありました』と、赤い字でキャッチコピーが書かれていた。その通りで、少年少女向けとなっているように、分かりやすく、子供たちの興味を引くよう、歌の解説が物語風の本づくりになっており、その内容は豊かで、大人が読んでも十分読み応えのある本だった。

ただ1つ、気になることがあった。本を開いた最初のページの「序」に、次のようにあった。「森岡先生の『萬葉集物語』が昭和15年(1940)に完成し、金蘭社から出版され、太平洋戦争後、昭和27年(1952)にまったく版を改めて富山房から再刊されました。このたびはその再版『萬葉集物語』の更なる改版の刊行です」。

つまり、もとこ先生が小学校に入ってすぐから読みふけた『萬葉集物語』は明らかにこの改訂版ではなく、戦前の初版本であり、今回の復刻本ではなかった。(今回の出版は再版の更なる改版ということで挿絵なども変わっており、必ずしも復刻本とはしていないが、その内容はほとんど同一であり、本稿では分かりやすく「復刻本」と呼ぶ)。



『萬葉集物語』復刻本(2008年刊)

そもそも、私はもちろん、もとこ先生も、昭和15年に刊行された『萬葉集物語』が、戦後しばらくして改訂版が出版されたことを知らなかった。今回の復刻本が刊行されて、初めてその事実を知ったのである。

復刻本が発行されたことを、もとこ先生に連絡すると、私以上に驚ろかれたが、それからしばらくしてからのことだった。もとこ先生から、突然明るい声で電話がかかってきたのだ。「私が使っていた『萬葉集物語』がありました!ビニール袋の中に大事に収められていましたが、表紙の色も黒く変色し、袋から取り出したら、バラバラになりそうな状態になっていたので、残念ながら中身を読むのは無理。なんとか奥付だけは確認したのですが、発行は昭和15年、森岡美子著『萬葉集物語』で、定価1圓90銭とありました」。

昭和12年生まれのもとこ先生が小学校に入ってすぐ読んだ本というと、「初版本」しかないが、それが中身を読むことができないとなると、何としても古書を探し出さねばならない。実をいうと、インタビューの前、もしもとこ先生の『萬葉集物語』が見つからなかった場合のために、古書を入手して、それを手に話してもらうこともちょっと考えたが、それはやってはならないと、思い直し、諦めた経緯がある。ただし、古本ネットで検索まではしたが、求める本はなかったことは付記しておく。

森岡美子著『萬葉集物語』
初版本（1940年刊）



そこで、今回である。再び古本ネットで、今度は初版本と昭和 27 年の改訂本の 2 冊を検索してみたが、やはり 2 冊とも、結果は、「該当件数 0 件」だった。それから約 1 年後、時々その検索を繰り返していたところ、幸運にも、難しいと諦めていた初版本の方が 1 冊、出てきたのである。しばらくして届いた本は、背がボロボロになった化粧箱に、もともと先生の本に負けず劣らず黒ずんで、頁を広げたらバラバラになりそうな状態だったが、なんとか中身を確認することだけはできた。さらに、その約 1 年後、昭和 16 年発行の 4 刷りを入手することができ、やっと細かいところまで読んでチェックすることができるようになったのは幸いだった。

そして、この本は、昭和 15 年、つまり「紀元 2600 年を記念」して刊行されたもので、今回復刻された本と同じ本ではあるけれど、実は違う本であることが分かった。「紀元 2600 年」とあるが、もちろん西暦の起源ではない。記紀の記載から神武天皇即位の年を紀元とする「皇紀 2600 年」のことで、この年国を挙げて奉祝の記念行事が行われた。その 1 つ、「国民奉祝歌」として「皇紀二千六百年頌歌」が作られたが、その作曲者「信時（のぶとき） 潔」の名をテークノートしておいてほしい。また、記念事業のメインイベントとして、同年東京五輪と冬季の札幌五輪、更には東京で万国博覧会の開催が決まっていたが、昭和 13 年に始まった日中戦争のため、いずれも中止になったという経緯もある（一方は戦争、もう一方は新型コロナのパンデミックが原因だが、現代と符合している）。

復刻本の「あとがき」を見ると、著者の森岡美子さん自身が書かれていて、高齢ではあったが健在であることが分かった。是非話を聞きたくて、できたらもともと先生と対談ができないかとも思い、ご本人に直接連絡を取ろうとしたが、病気で入院中のため会うことができなかった。

その復刻本の「あとがき」に、「序」と同じことが、著者自身の言葉で、次のように書かれている。

＜「万葉集」が日本最古・最大の文化遺産であることをうたがうものはいません。しかし、みんなが作品とその世界をよく知っているかとなると、いかがでしょう。これまで多くの「万葉集」についての一般向けの本が刊行されてまいりました。それらはどれも、その素晴らしい世界を多くの人に深く鑑賞してほしいという情熱に裏打ちされたものでした。この『萬葉集物語』も、そうした一冊として、昭和 27 年に刊行しました。

じつはこの本、同一タイトルで昭和 15 年に刊行されているのです。時代は、第 2 次世界大戦勃発の 1 年後、太平洋戦争開戦 1 年前です。戦後、昭和 27 年の刊行はその改訂版ともいべきものでした。内容、章立てなどに訂正、修正を加えましたことはいまでもありません。

ここに初版本に「訂正、修正」を加えた、と書いてあるように、復刻本の「あとがき」に代わる初版本の「をはりに」は、まさに「訂正、修正」が加えられていた、というより、「をはりに」の最後の部分はすべて削除され、まったく別の「あとがき」に書き換えられていた。カットされた初版本の「をはりに」の最後は、実は、次のようにしめくられていたのである。

＜皆さま、どうぞ萬葉精神をしつかり心につけて、あの『大君のために、父母をおいて我が身をかへりみることなく、御楯となって、海行かば水づく屍にならう』と誓った、萬葉人のやうな忠義な人になって下さい。そして、さういふ忠誠の心をもつた萬葉人を、私たちが尊敬するやうに、皆さまも後世の日本人たちから、称賛されるやうな人におなりにならなければなりません。

少年少女の皆さまの務は、戦野に赴くことではありません。りっぱな銃後の國民となることこそ、天子さまへの忠、日本への愛国であります。皆さまは先ずこの聖戦下の、りっぱな銃後の國民となることをおはげみ下さい。今度の聖戦は、日本開国以来の大事件として、やがて歴史に記されることせう＞。

多少予測はしていたが、驚いた。まさに、幻の「をはりに」だが、万葉集が、「天子さまへの忠、日本への愛国」、文字通り、「忠君愛国」の物語になっていたのである。そして、本稿の冒頭の歌 2 首、原文で書かれた歌で、初版本の裏表紙を飾っていたものだが、改訂版では、これも真っ先にカットされていた。その経緯については、次回に取り上げる。

初版本の裏表紙の歌
海行者 美都久屍 山行者
草牟須屍 大皇乃 敵尔許
曾死米 可敵里見波 勢自
御民吾 生有驗在 天地之
榮時尔 相樂念者



もとこ先生に、復刻本は、先生が読んだ『萬葉集物語』とはまったく違う本になっていることを伝えると、先生は、「そうですか。『忠君愛国』については、全く覚えていません。私は、美しい歌の数々を、まるで童話のように、繰り返し読んでいました。今さら、森岡さんにお目にかかって、『忠君愛国』のことを問うても仕方ないので、会うのはやめておきます」。

もとこ先生が、『萬葉集物語』を童話のように読んでいて、忠君愛国など目に入らないほどに万葉集の虜になったのか。元駐エジプト、イラク大使のご主人邦雄氏は、「敗戦の色濃くなった太平洋戦争末期、父親が勤務していた上海から、輸送船で米潜水艦に追いかけられながら、ようやく引き上げてきた苦しい戦時体験があったから、忠君愛国教育に染まらなかったのかもしれない」と推測する。「もとは、与謝野晶子の『君死にたまふことなかれ』を深く愛し、よく口にしていました」ともいう。しかし、すべての子どもが、もとこ先生のように、軍国教育の影響を免れることができたわけではないだろう。『萬葉集物語』は、子どもたちにとってはなんと残酷な、と言っても過言ではない、もう1つの「万葉集物語」だったのである。

もとこ先生は、2013年に亡くなられた。享年75。翌14年、その後を追うように、『萬葉集物語』の著者森岡美子さんも、享年102歳で、天寿を全うされた。天上で出会って、お二人は今、「萬葉集」のことを語り合っているのだろうか。先生のことだから、「なぜ、萬葉集を『忠君愛国』物語に仕立てたの？」と問うているのに違いないのだけれど、まだ報告はない。

もとこ先生が亡くなられてしばらくして、邦雄氏から、挨拶状が届いた。その封筒に、1通の天国からのハガキが同封されていた。「おげんきで、おすごしのこととおもいます。今後しばらくは、私への郵便その他はおおくりくださいませよう。実はわたし人生最後のフィールド・ワークにでかけることにいたしました。パソコン環境もよくないところで、ましてや郵便もとどきません。帰国いたしましたら、ご報告もうしあげます。どうぞ、おからだ、おこころ、お元気で。片倉もとこ」。

いかにタフなもとこ先生でも、今回天国のフィールド・ワークからの「帰国」は難しいだろう。忠君愛国の報告を待っても無駄だろう。これまでそのフィールド・ワークから「帰国」した人は、残念ながら、まだいないようだから。

ところが、それからしばらく後、また思いがけないことが起こった。天国のもとこ先生から報告があったのだ。亡くなって2か月後の2013年4月、先生は、1冊の本を上梓したのである。「旅だちの記」である。帰れぬ旅立ちの時が近いことを告知された先生が、最後のフィールド・ワークとして、自らの「からだところ」の現地調査を行った、その報告書である。まさに「オシャレな文化人類学者らしいもとこ先生の最期だった」のである。



その本が刊行された半年後、もとこ先生の志を受け継ぎ、財団法人「片倉もとこ記念沙漠文化財団」が設立された。財団は、「沙漠文化を大切に」、「沙漠そのものの美しさをひきだす」ことを目的として、沙漠文化に関する調査、研究の支援・助成、そして、講演会や展示会、学校への出張授業等幅広い活動を展開。もとこ先生の研究資料の整理、公表するとともに、その研究を引き継ぎ、これまで数度にわたり先生が調査したサウジアラビアの現地に調査団を派遣。50年前の先生のフィールド・ワークの成果と合わせて、大阪と横浜で、「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年」という企画展を実施した。また、沙漠文化に関する調査研究などに功績のあった人々に、「ゆとろぎ賞」を贈呈している。もとこ先生は、まだ生きていたかのような。